

チャレンジ・ザ・ドリーム

Challenge the Dream

～群馬の明日をひらく～

令和2年10月1日（第91回）放送

当協会は、平成25年度より、FM GUNMAと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の企業のトップインタビューを中心に構成しています。

【プログラム】

■トップインタビュー

学校法人昌賢学園

鈴木利定 理事長

■保証協会からのお知らせ

「チャレンジ・ザ・ドリーム」令和元年度版

単行本発行について

■チャレンジ企業紹介コーナー

株式会社ジースリー

◎アナウンサー 奈良のりえ

プロローグ

こんにちは。ご案内役の奈良のりえです。夢への挑戦をテーマに企業トップへのインタビューなどをおよそ1時間にわたって放送している「チャレンジ・ザ・ドリーム」です。今日のトップインタビューは、群馬医療福祉大学をはじめ、認定こども園、専門学校などを運営する学校法人昌賢学園の鈴木利定理事長、73歳です。父親から引き継いだ幼稚園の運営からスタートし、社会福祉や介護、看護の人材育成に邁進しつつ、専門学校、短大、大学、大学院と次々に新しい学校を開設してきました。鈴木理事長に挑戦の様子や教育にかける思いなどを伺っていきます。番組後半は、赤城山のふもとでウナギの養殖に乗り出した伊勢崎市の会社を紹介します。

トップインタビュー

学校法人昌賢学園

鈴木利定 理事長

——学校法人昌賢学園の鈴木利定理事長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただきました。鈴木理事長、どうぞよろしくお願いたします。

鈴木理事長：よろしくお願いたします。



【収録風景：FM GUNMA スタジオにて】

【教育者としてのスタート】

——学園の沿革を拝見しますと、発祥は室町時代にさ

かのぼるそうですね。

鈴木理事長：そうです。宝徳元年に寺子屋ができたのが始まりです。

——その寺子屋がスタートということなのですね。

鈴木理事長：はい、そうですね。

——学園のお名前ですが、日二つの昌に賢いと書く『昌賢学園』は、長尾氏のお名前から取ったと聞いていますが。

鈴木理事長：はい、そうです。祖先である長尾景長が出家して、『昌賢入道』という名前に変え、学問所を開設したのが、宝徳元年ということなのですね。

——とても歴史のある昌賢学園ですが、戦前は前橋に昌賢中学という学校があったのですか。

鈴木理事長：はい。現在の高等学校にあたる学校を経営していました。戦後は日本の国全体が、大変な食糧難で、教育どころではない状況でした。学校も一時休校になり、最終的に閉校になりました。

——それで、残ったのが幼稚園ということですか。

鈴木理事長：そうです。

——お父さまはそのころの様子について、理事長にお話しされていましたか。

鈴木理事長：学校を休校にはしていたけれども、勉強したい生徒には月謝をいれず何年も教えていたという話を父親から聞きました。非常に熱を込めてその話をしていましたね。

——そうでしたか。無償で教えていらしたのですね。

鈴木理事長：そうなのです。とても偉いと思います。教育者としてね。

——きっと学校を本格的にもう1回やりたいという、そんな夢もお話ししていたのではないですか。

鈴木理事長：そういった想いがあったと思います。毎日、夕ご飯を食べるときに、家族を座らせて、5分から10分くらい自分の今後の方針を述べるわけですよ。でも我々は、早く食事をしたいので、早く終わってほしいと思っ

ていました。正座をして話を聞いていたのですが、もぞもぞ、もぞもぞすると、注意をされたり、怒られたり、我々としては大変迷惑でしたね。ご飯が冷めちゃうし、お腹もすきますから。

——ちなみにどのような夢をおっしゃっていたのですか。

鈴木理事長：それはね、今、私がやっている大学までつくるといふものでした。私は小さいながらに、そんなことは絶対実現できないだろうと思っていましたよ。しかし、今考えてみると、無駄でも何でも、子どもに自分の夢を託す、話をするっていうことは大事ですね。

——今のお話を伺っていると、理事長は幼稚園を継ぐというお考えはあまりなかったようですが。

鈴木理事長：その当時は考えていなかったですね。なぜかと言えば、幼稚園の名前は世間に認められていますけれども、実際の生活はまだ苦しかったのですよ。幼稚園は無理だと思っていました。

——ご自身では継ぐという選択肢はなかったのですか。

鈴木理事長：私は自分で経営するのではなく、勤めようと思っていたのです。

——ああ、そうですね。

鈴木理事長：大学を卒業して、とにかく教員になろうと思ひ、高校の教員になりました。高校の教員になる年齢ってというのは、高校生3年生の年齢と5つぐらいしか変わらないですよ。

——そうですね。

鈴木理事長：高校生からしてみると、先生というより、お兄ちゃんという感覚ですよ。そのお兄ちゃんが、あの教壇に立つわけですよ。私は国語の古文を担当していたのですが、ある時、授業を始める前に大学受験の模試の問題を生徒が持ってきて、「先生、この問題を解いてくれ」ということがありました。今ではそんなことしないと思いますが、当時の私は授業そっちのけにして、その問題を解くわけですよ。そうすると授業の1時間終わっちゃうのですよ。で、その間、他の生徒は遊んでいる。そんな中、私は出された問題が解けないので、「申し訳ないけれども、次の授業のときまでに解答する」と言って、1

週間、一生懸命考えましたが、それでもわからない。私が正解とするならばこの2つだろうというところまで持って行って、次の週に彼らに解答したのです。それで、この難関が終わって助かったと思い、職員室でご飯を食べていると、彼らが来て、「先生、さっきはありがとうございました。でもあの問題は、大体解答のない問題で」って言うわけです。

——先生も試されていたのですか（笑）。

鈴木理事長：そうです。そうしたら隣にいるベテランの先生が「鈴木さん、たいしたものだ。洗礼を受けただけ認められたのだから」とおっしゃってね。

——面白いエピソードですね。

鈴木理事長：そんなことがありましたよ。

——もうそのまま教員生活まっしぐらでしたか。

鈴木理事長：そうです。

【父の夢を実現するために】

——ところで、理事長はその後大学院に戻られます。それはどうしてでしょうか。

鈴木理事長：教員をやっていた時に芽生えたのが「学校をつくろう」という意志でした。その想いを通すために、「やはり上に立つ者は、まず学問を付けながら将来のことを考えていこう」というような、本当に単純な発想からの行動でしたね。

——きっと教員経験の中で、教育に対する想いが、あらためて芽生えたということでしょうか。

鈴木理事長：そうですね。恥をかいて洗礼を受けましたが、彼らがその日を境にいろいろなことを私のところに聞きに来るようになりましたからね。教えたり、勉強するっていうことは、こういうことが醍醐味なのだなと思いました。父親が言った教育の良いところはこういうことだったのだなぁと感じました。

——その間、幼稚園の運営はどのようになっていたのですか。

鈴木理事長：私が大学院のドクターコースを履修してい

たときに父親が亡くなったのですが、長男だから名前だけは継ぎなさいと言われました。私は肩書だけで、実際は母や姉や家族で運営するから、ということだったので任せました。しかし、そのときに頭によぎったのは、今後、家族や勤めている人たちの生活を保障しなきゃならないということですよ。これは大変だなと感じました。というのは、この学園が今の形態のまま何年も続くわけがありませんから、この学園をどのような方向に持って行ったら良いか、自分なりに考えましたね。そこで、大学院に行きながら、まず武者修行ということで、いろいろな私立の高校や大学で非常勤として働きました。

——学校運営の方法を学ぶためということですか。

鈴木理事長：そうです。それと同時に、全く面識のない私立学校の理事長に突然電話をしまして、実際にお会いをして、お話を聞いたりしました。その中で、父親の理念と、ほかの私立の理事長の理念との間に、非常に格差があるのですよ。要するに学校とはいえ、私立学校なので利益をも追求するということです。それでもいろいろな方のお話を伺っていると「私でも学校経営できる」という意欲がわきましたね。そして、父親が理想とした学園をつくってみようと思い立ちました。

——実際に園長になられますよね。そのときには、どのように園を運営しようと思いましたか。

鈴木理事長：自分自身にも多少力が付いたので、勤めを辞めた時期だったのです。自分が思い描いた幼稚園にしようということで、まずはマイクロバスを3台購入して、私が運転することにしました。

——え、園長がですか。

鈴木理事長：園長が運転。それで、私には弟がいますが、その弟も運転。甥もいて、甥も運転。ですから、家族でその3台を運転して園児を送迎しました。

——もう来たいと言ってくれば、どこまででもお迎えに行くよということでしょうか。

鈴木理事長：そうです。そういったスタンスの幼稚園にしました。その当時で言えば、私が運転して群馬町まで行っていましたね。そして、教育の理念については、明

治時代から昭和にかけての幼児教育の学者に、倉橋惣三という方がいたのですが、その理念が「子どもは自由だから、環境設定を自由な環境設定にしろ」、「林のような木々のこもれ日の中で自由に遊ばせろ」というものでした。その理念に共感して、外で小鳥を300羽ぐらい飼いましたよ。小鳥だけではなく、鶏や、ホロホロ鳥という鳥まで飼いましたね。ホロホロ鳥は当時、群馬サファリパークから5羽いただいて庭に放しました。

——うわぁ

鈴木理事長：で、鶏はその辺でみんな卵を産むしね。

——子どもたちに体験通して教育をしていったということですか。

鈴木理事長：そうです。それからもう一つは、園児の親に保育の方法を理解してもらうために、園児の様子や我々の保育の仕方など、見に来てもらいたいのですね。ただ、今もそうですが、親が幼稚園に呼ばれてくるといふことに抵抗があるみたいなのです。面倒くさいとか。けれども、子どもを送ったあと、親同士が公園で話しているのです。この親を何とか幼稚園に引き入れようということで、親のクラブをつくりました。例えばパッチワーククラブとか、コーラスクラブとか、子ども教育講座とか、ときにはロイヤルホテルへ連れて行ってテーブルマナーなどもやりました。

——お母さん方も喜びますよね。

鈴木理事長：それは喜んでいました。それから、親用の部屋を毎日開放していますから、みなさん時間があるときにその部屋に来るわけですよ。で、私は文学が好きだから、読書会を開いたのですが、読書会はあまり人気がありませんでした（笑）。

【情報収集と資金調達について】

——さて、1989年（平成元年）に、介護福祉士や社会福祉士を養成する群馬社会福祉専門学校、こちらを開校なさいましたけれども、これはなぜ福祉の専門学校をつくったのですか。

鈴木理事長：これはね、次の段階に入ろうと思ひまして、

前橋市長に「いい高校をつくりたいのですが、どうですか」と相談したところ、「ああ、いいところあるよ、そこを提供しましょう」と言っていたので場所を紹介されたのですが、その場所が山みたいところで、ちょっと交通面で不便だったものですから、「いやいや市長さん、もう結構です」と言って、お断りしたのです。そういうふうに学校の候補地を探しているうちに、だんだん少子高齢化であるということが国内でも社会問題として取り上げられ始めました。そんな情勢で、高等学校の設立にこだわるのは、時代的にどうだろうと真剣に考えていました。そんなとき、「社会福祉基礎構造改革の計画を立案して、介護福祉士と社会福祉士の養成をするための養成制度をつくる」という新聞記事を目にしました。それで、厚生省に電話をしたら、法律を今つくっているところだということだったので、それから半年ぐらい待って、厚生省へ行きました。そうしたら「まだ早いよ、あなたの方」って言われてしまったのですよ。

——アンテナの高さと情報の早さですか。

鈴木理事長：情熱があったのでしょうか。そういう時期だったですよ。

——でも、これからの時代はここだというふうにかじを切って、そして福祉の専門学校をおつくりになったのですね。

鈴木理事長：そうですね。ところが、自己資金は本当に皆無でした。幼稚園を何年も運営していましたが、貯えなんてそんなにないわけですから。しかし、専門学校を平成元年までにつくるということにとっても意義があるのです。結果から言うと、全国でも23校しかないなかで、群馬県では初めてでしたから。

——そうでしたか。その介護福祉士と社会福祉士の専門学校の草分けなのですね。

鈴木理事長：そうそう。大学も含めてね。

——えー、大学も含めて。

鈴木理事長：これ、専門学校でも大学でも養成できる専門職なのです。

——ああ、そうでしたか。要は専門学校をおつくり

なったけれども、その当時から短大や大学の設立というのも視野にあったということなのです。

鈴木理事長：そうです。まずは実現できるものから出発しようということで、最初に専門学校をつくろうとしたのです。ところが自己資金がなかったので、群馬銀行に融資のお願いをするために、計画書をつくって持っていったところ、「わかりました。1週間から10日ほど時間をください。役員会で検討します」と言われました。それで、10日くらい待って結果を聞いたところ、「結構ですよ」と承諾をいただきました。これにはほっとしましたね。

——そのゴーサインは嬉しかったでしょうね。

鈴木理事長：そのとき、「なんで貸してくれるのですか」って聞いてみたのです。そうしたら、「オーナーの理念がしっかりしていて、将来をきちんと見据えていることが認められたのですよ、理事長」と言われたものですから、「ああ、そうですか。だけど、私で大丈夫ですか」って言ったら、「大丈夫です」と言ってくれました。あれは、よかったですねえ。

——やはりここは理念ですね。その柱がぶれなかったと言うことでしょうか。

鈴木理事長：群馬銀行は今もメインバンクですが、足を向けて寝られないですね。あのとき、群馬銀行が融資をしてくれなかったら、それで行き詰ってしまっていたかもしれませんから。

——もう本当にね、地元の金融機関の皆さまも挙げて、この教育機関は必要だという、そんなエールだったのでしょうか。

鈴木理事長：そうですね。

——はい。この後は、短大、大学の開校の様子を伺ってはいかがでしょうか。その前に1曲お届けします。この曲の選曲理由は何でしょうか。

鈴木理事長：娘の車で、この曲が流れたものですから。

——とってもリズムカルな曲ですものね。

鈴木理事長：そうです、そうです。それでね、「一番大好きなママ」ですね。「あ、これはいいな」と思って。

——それではお届けします。エイジアエンジニアで『世界で一番素敵な人』。



【前橋キャンパス（左上）・本町キャンパス（右上）・藤岡キャンパス（下）】

【育んできた理念が開花する】

——専門学校開校から7年後の1996年に群馬社会福祉短期大学を開学しました。やはり短大の開学は、専門学校よりハードルが上がるのですか。

鈴木理事長：相当上がりますね。専門学校の認可は県なのですが、短期大学は当時の文部省でした。国の審査ですから、相当にハードルが上がります。校舎も先生も、当然内容も、全く違いました。あの当時、文部省の相談室に行くと、コーナー別に担当が割り振ってあって、どの学園が何を申請するのかがすぐにわかりました。我々は開学のための準備室を設けましたが、もう本当に怒られ、注意されましたね。人手が3人か4人程度しかいなかったものですから。

——これじゃあ開学できないってということでしょうか。

鈴木理事長：そうです。それに、開学の申請をするのに設置基準というものがあります。設置基準の中に、大学の収入、学生からいただく学費ですね、その収入が2年間なら2年間なかったとしても、教職員への給与や税金の支払いなどを含めた経営ができる資金があるか、とい

うものがあります。

——うわぁ、それも結構難題ですね。

鈴木理事長：ですから、銀行にお金を借りたりして、懸命に資金繰りをするわけですよ。でも、どうしても足りない。そのような中で申請が受理されて、審議に入りました。審議では資金不足について質問されるわけです。本来であればその資金不足をどうやって解決するかについて回答しなければならないのですが、私はそのことについて全く回答しないで、父親が夢に描いた学園構想を、文部省の20人、それから審議官10人、あわせて30人の前で、20分間話しました。資金不足を問われているのに、ビジョンを語ったのですね。「その話をやめて質問に答えなさい」と言われたらやめようと思っていましたが、とにかくもう駄目だから自分の想いだけは聞いてもらいたいと思い、話し続けました。審議官から見れば小僧ですよ。そんな私が学園のビジョンや介護の重要性を訴えたわけです。そうしたら、司会をしていた文部省の係長が「はい、20分経ったので時間になりました。鈴木理事長は、答えにならない答えをしましたがけれども、時間になったので、この審議は終了します」と言って終わったのです。その当時はまだ携帯電話を持ってないですからね、文部省の中の公衆電話に行って、「終わった」ということを学校に示さなきゃならないでわけです。

——「駄目だったかも」という電話ですか。

鈴木理事長：いや、「終わった」と。

——あ、「終わった」。「駄目だった」じゃなくて、「審議が終わった」ってことですね（笑）。

鈴木理事長：正直言いますと、十中八九諦めていました。でも、まだ回答はもらってないわけですから。

——もらってないですねえ（笑）。

鈴木理事長：そこに夢を懸けたのです。それで、電話をかけようとしたとき、審議官の1人の先生、まあ一流の大学の先生ですよ。その先生が、私が受話器を持っていたときに、肩をたたいて、「君、今度、私たちの仲間になるので、よろしくね」と言ってくれたのですよ。

——ええっ……。

鈴木理事長：物語ですよ。

——本当ですね、ドラマですね。

鈴木理事長：そう、ドラマのようですよ。そして、その後の正式な回答では、その項目は留意事項として、開設後1年間これをきちんと明記しなさいと。

——粋な計らいというか、情熱というかが伝わった瞬間ですね。

鈴木理事長：そうですね。やはり目標を立てて、何に向かっていったらいいかっていうことをね、真剣に考えていくべきですよ。

——そうですね。しっかりその目標さえぶれなければ、チャンスって開かれるものなのかもしれないです。

鈴木理事長：私がこの学園を大きくしたということはね、私の力じゃなくて、先祖や父親が苦勞した事柄が今、開花したということですね。

——そうですね。その後、四年制大学を開学して、専門学校、短大、大学、さらには大学院というふうに学校をつくってこられましたけれども、その根底には、やはり教育に対する強い思いがあるのだとお聞きして感じました。どういった思いをお持ちですか。

鈴木理事長：これはね、私が常に心掛けていることですが、「敬」と「恥」というものがあります。「敬」は尊敬の敬。そして「恥」というのは恥じる、耳の心、恥じるということ。これは儒教の根本的な観念だと言われますが、「人間は、より偉大になるものを自分で発する心があるのだ」ということですね。まあ理想ですよ。これが「敬」。それから人間は、おのずから省みるところに生ずるということを書いて、必ず人間は反省をするという心、これが「恥」ですね。人間である以上、この2つは必ず持ち備えているから、人生は目的を持って歩みなさいということです。これは孔子と孟子が言っていることなのです。

——教育にはといいましょうか、人生にはと置き換えてもいいのかもしれませんが、理想を掲げることが大切で、なおかつそれだけじゃなく、反省することも、自らを省みることも大事なのだということですね。これが

理事長の根底にあるのですね。

鈴木理事長：はい、根底にあるわけです。

——理事長が一代で学園をつくり上げましたけれども、振り返ってみて、鈴木理事長、成功のポイントって何だったと思いますか。

鈴木理事長：成功かどうかは、私にはわかりませんが、やはり目標を掲げて、どのように目標に向かって考えたらいいのだろうかとか、何に向かって行動したらいいのだろうか、そして、何を基にして今後の在り方を決めたらいいのだろうか、ということを常に考えることでしょ

うね。

——常に自分に問いかける。そこには目標がなくてはいけないということですね。

鈴木理事長：そのとおりです。

——それから、お話をお伺いしていると、やはり鈴木理事長の挑戦する力と言いますか、情熱とか、そういったところも結構成功のポイントではないかなというふうに感じましたけれども。

鈴木理事長：ああ、ありがとうございます。

——ご自身ではどう思われますか。

鈴木理事長：いや、若かったからかもしれないですが、やはりその背後には、父親の大きな夢があったのでしょ

うね。

——心の教育をしたい。子どもたちの心の教育だということをお父さまからとうとうと聞かされて育ったのですね。

鈴木理事長：そうそう。繰り返し聞かされて、その当時はあまり聞いていませんでしたが……。

——その原体験を守ったということでしょうか。

鈴木理事長：ええ。その通りです。

【体を動かす趣味】

——仕事の話から離れますが、鈴木理事長のご趣味は何ですか。

鈴木理事長：趣味はですね、マラソンに、乗馬にスキー。そしてね、昔はね、ヨットをしました。

——あら、幅広いですねえ。

鈴木理事長：体を動かすことが好きですね。

——結構筋肉質ですよ。腕の辺りとかね。ウエイトトレーニングをしているのですか。

鈴木理事長：いえいえ。毎朝マラソンで体を動かしています。

——どのぐらい走りますか。

鈴木理事長：45分。

——キロじゃなくて、時間ですか（笑）。

鈴木理事長：キロじゃなくて、45分（笑）。

——45分と決めて走っているのですね。走っているときは、何か考えているのですか。

鈴木理事長：ああ、これねえ、その日の予定を頭に入れて、そして、走りながら構想を練っていますね。朝早く起きて、自分一人の時間でそういうことをやっているね、その日のスケジュールや、やらなくちゃいけないことを非常に明確にできます。

——朝活ですね。早起きは三文の徳ですね。

鈴木理事長：奈良さんもやってください。

——わかりました、頑張ります（笑）。それから、学校の球技大会は、理事長ご自身もプレーヤーとして参加されると聞きましたが（笑）。

鈴木理事長：はい、はい。私はあまり上手ではなく詳しいことは知らないのですが、バレーが好きなのですよ。

——そうですか、じゃあバレーボールを学生さんと一緒にプレーされるのですか。

鈴木理事長：はい。

——いやいや、いいですね。そういうところでまた交流も育まれますよね。

鈴木理事長：そうですね。学生は体力的に強いですから、本当なら全く仲間に入れないですが、彼らは気を使ってくれますよ。私はいつも威張ってやっているから（笑）。



【学生と日常生活の様子】

【上善は水の如し】

——仕事の話に戻りますが、昌賢学園の今後の目標を教えてください。

鈴木理事長：来年4月開設予定の医療技術学部について、認可を申請しています。その目的は、臨床検査技師と臨床工学士の養成です。これは今、医学の中では欠くことのできない技術者なのです。手術や検査の場で注目を浴びている専門職なのですが、人材が不足しているのでぜひ、養成しようと考えています。

——社会が必要とする人材を養成していくための学部をおつくりになるとお考えなのですね。

鈴木理事長：はい、そうです。

——最後に、新しい事業に挑戦したいと考えている人や、若い人へのメッセージの意味も込めてお話しいただければと思います。新規事業に取り組む中で大切なことは、鈴木理事長、何だと思えますか。

鈴木理事長：新規事業を行うには、やはり人間性が問われるわけですが、中国の老子という哲学者の言葉をお伝えしたいと思います。「上善は水の如し」というものです。上下の「上」、善悪の「善」、女に口と書いて「如」。上善とは、人間の理想的な生き方のことです。つまり老子は、理想的な人間の生き方は水と同じですよ、ということ

言っているのです。

——水と同じですか。

鈴木理事長：はい。水には3つの特徴があると言っています。1つ目は、水は丸い器の中に入れると丸くなるし、四角い器に入れると四角になる。水は非常に柔軟性があるということ。これは確かにそうですよね。我々も生活をしていると、柔軟になれず、頑なになって、反省することってたくさんあります。そして2つ目は、水がなかったら地球上の生物は生存しないわけですから、我々はその大きな恩恵を受けています。そして水は当然のように上から下に行く。低いところで流れているように、非常に謙虚なものであること。それから3つ目は、水は常に静かであるということ。しかし静かだけれど、急流となると、大きな硬い岩も打ち砕いてしまうエネルギーを持っている。いつも静かであるけれども、いざとなれば大きな力を発することができるといことですね。そういう3つの事柄を、今後何かを行う人たちが考えてくれたらいいなと思います。やはり最終的にそういう事柄と同時に努力が必要になると思います。

——柔軟性と、謙虚な気持ちと、困難にぶつかっても負けない強さ。

鈴木理事長：そう、そのとおり。

——ぜひ皆さんの心にも刻んでいただけたらと思います。

鈴木理事長：そうですね。

——今日のトップインタビューは学校法人昌賢学園の鈴木利定理事長にお話を伺いました。リクエスト曲、もう1曲ですが、エピソードはございますか。

鈴木理事長：娘の結婚式で娘が流した曲です。

——ええ、はい。さあ、それではお届けいたしましょう。MISIAで『アイノカタチ』です。今日はどうもありがとうございました。

鈴木理事長：どうもありがとうございました。

保証協会からのお知らせ

「チャレンジ・ザ・ドリーム」令和元年度版 単行本発行について

——ここからは群馬県信用保証協会からのお知らせです。群馬県信用保証協会の磯調査役にお話を伺います。磯さん、よろしくお願いします。

磯調査役：こちらこそよろしくお願いします。

——平成25年4月にスタートし、現在8年目を迎えている「チャレンジ・ザ・ドリーム」ですが、保証協会では、今年も、令和元年度に放送した内容をまとめた単行本を発行したそうですね。

磯調査役：はい、そうですね。当協会では、令和元年度に番組で放送した「トップインタビュー」の内容を一冊にまとめた単行本を発行しました。単行本は平成25年度版から継続して発行しており、今回で7冊目となります。ご出演いただいた皆さまから、経営者としてのご経験やチャレンジの軌跡などとても興味深いお話がたくさん詰まった冊子となっています。また、新規事業に取り組む方や、若者へのアドバイスもお話しいただいていますので、創業への一歩を踏み出すきっかけとなれば嬉しく思います。

——この番組にご出演いただいた社長のみなさまから、ご経験に基づく貴重なお話を伺っていると、気持ちがポジティブになりますよね。また、会社を経営されている方や創業を志す方にとって、とても参考になる内容になっていますよね。

磯調査役：そうですね。是非、たくさんの方にお読みいただければと思っております。また、学生の皆さまにも創業に対する興味をお持ちいただければと思っておりますので、高校・大学・専門学校などの教育機関にも配布させていただきます。

——社長さんたちの素敵な言葉が詰まった冊子ですから、「読んでみたい」と思われる方がいらっしやと思います。そうした方は、どうすれば手に入れることができますか。

磯調査役：はい。数に限りはございますが、ご希望があ

れば、単行本を差し上げます。ご希望の方は、郵便ハガキにお名前、ご住所、連絡先を明記の上、当協会の企画課までお送りください。ハガキの送付先住所などは、当協会のホームページでご確認ください。

——「チャレンジ・ザ・ドリーム」の単行本を読んで、創業を志す方が増えるといいですね。

磯調査役：そうですね。当協会では、夢に向かって挑戦する方をサポートする創業支援を実施していますので、事業を始めたいとお考えの方は、是非一度、当協会へご相談ください。

——磯さん、今日はありがとうございました。

磯調査役：ありがとうございました。

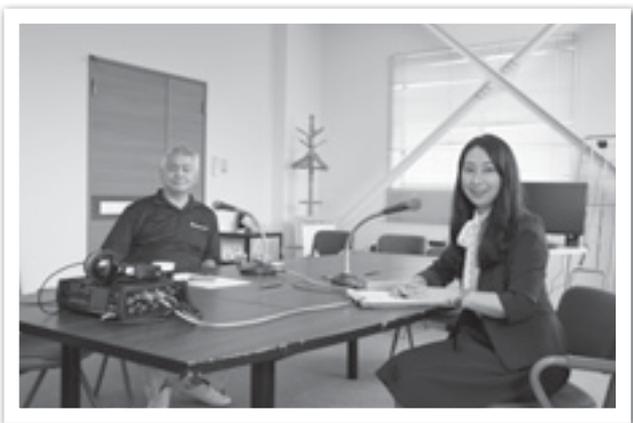
チャレンジ企業紹介コーナー

株式会社ジースリー

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」次に紹介するのは、ウナギの養殖に挑戦している伊勢崎市の会社です。株式会社ジースリーは、太陽光発電所の施工・販売・運営などを手がけている会社ですが、3年前からウナギの養殖に挑戦しています。ウナギというと、初めに思い浮かぶのが静岡県ของ浜名湖ですが、群馬県内でのウナギの養殖はどのように行うのでしょうか。伊勢崎市昭和町にあるジースリー昭和事業所を訪問して、金子史朗社長、59歳にお話を伺ってきました。

——私は今、伊勢崎市にある株式会社ジースリーの昭和事業所に来ています。金子社長、今日はどうぞよろしくお願ひいたします。

金子社長：こちらこそよろしくお願ひいたします。



【収録風景：ジースリー昭和事業所にて】

——先ほど事業所内を見学させていただきましたが、建物の中に大きな丸い水槽、直径4～5メートルぐらいですか。

金子社長：はい、そうですね。

——この丸い水槽が幾つか設置されていました。あの

ウナギはどのぐらいの期間、育てているのですか。

金子社長：約1年半ですね。

——ああ、もう食べられるのですか。

金子社長：食べられるものもあれば、まだ成長過程のものもあります。

——いや、ずいぶん大きな、ウナギというより、ナマズのような……（笑）。

金子社長：そうですね、ナマズのような大きさですね。先ほどご覧いただいたウナギは、ほとんど主と言っても過言ではないぐらいの大きさです。重さは大体1.5キロくらい、直径で大体7センチくらいの太さがあります。

——まあそれも実験的に育てているというウナギですよ。

金子社長：そうですね、はい。

——他のところにはもっと大きな養殖場があるそうですね。

金子社長：はい、前橋市の荻窪町というところになりますが、約1万5,000平米の土地を去年の12月に購入しました。そちらのほうに約2,800トンの水量で養殖ができる設備があります。

——水の量は相当ですけども、これ、水槽で言うと、社長、どのぐらいになりますか？

金子社長：縦横12メートル×15メートル、深さが1メートルの水槽が8基あります。それ以外に、4メートルプールですとか、それより若干小さい縦横4メートル×10メートルの水槽があり、全部で12基の水槽が設営されています。

——1列にずらっと並んでいる？

金子社長：ずらっと並んでいます。短距離走ができるぐらいの長さがあります（笑）。

——短距離走ができる、確かに（笑）。ところで、ジースリーはもともと電子回路の基盤に使う銅板の販売を行っていて、その後は太陽光発電の事業に進出したと伺っています。そんなジースリーが、どうしてウナギの養殖を始めたのですか。

金子社長：いろいろな話をすると、とても長くなりますが、まず、食べるウナギが何でこんなに高いのか、という疑問から始まったことですね。

——あ、ご自身の疑問から。

金子社長：はい。そうですね。この値段だと、やはり頻繁に食べることができないなと思ったことがきっかけです。栄養価の高いウナギを、もっともっと広く地元の皆さんに食べていただきたいな、という想いが、まずスタートでした。ただ、いろいろ悩みは尽きなくて、許可のない者がウナギを養殖してはいけない、という法律がありまして、そういったところが非常に困難を極めました。いつかは諦めましたが、ある業者さんから、養殖の許可について譲り受けることが可能となったので、ウナギの養殖をやるということで、社員の意思を確認した上でゴーをかけました。

——そもそも社長、その養殖の仕組みというのはどのようなになっているのですか。

金子社長：日本国内では、例えば海辺に行ってシラスウナギを捕獲する、もしくは海外からシラスウナギを購入して養殖する、大体そういうパターンですね。

——稚魚を仕入れると。

金子社長：そうですね。あくまでも稚魚を仕入れないと養殖は不可能ですね。

——養殖に向けて、具体的にはどのようなことから手を付けていきましたか。

金子社長：まずは、ウナギにも種類がありますから、どのウナギを選ぶかということからでした。日本でよく食べられているのがニホンウナギ。一般的に自然で獲れるウナギから養殖されているウナギがニホンウナギです。それ以外には、台湾のほうからきているジャポニカという種類のウナギ。あとはフィリピンにはビカーラという種類があります。それと、ヨーロッパのほうにはヨーロッパウナギがありますが、絶滅危惧種になっているので輸入はできません。それ以外に、アメリカ・カナダのほうから来るロストラータと、たくさんの種類があります。

——ひとくちにウナギと言っても色々な種類があるの

ですね。

金子社長：それぞれに味や食感が違いますので、どれが日本人の舌に合うかをテストしました。そこで、養殖が盛んな中国に行って5業者くらいの養殖場を見に行きまして、試食をさせていただきました。その中で、アメリカ産のロストラータ、あとはカナダのロストラータという種類のウナギが、食感、味、全てにおいてニホンウナギに匹敵するものだなというふうに感じて、ロストラータを養殖することに決めました。

——その次にはどのような段階に入っていましたか。

金子社長：まず市場調査から入らなきゃいけないということで、去年の8月に行われたシーフードショーで実際に試食会をやってみました。ウナギは中国から買ってきて。

——あ、なるほど、なるほど。

金子社長：それを皆さんに試食していただいたところ、非常に好評価をいただきました。それから、シラスウナギをどこから買えばいいのというところなのですが、まず私もウナギというものに対する黒い闇みたいなものっていうのは、うわさで聞いていましたものですから……。

——黒い闇（笑）。

金子社長：黒い闇ですね。まあ白い闇というのはないと思いますが、どうしてもブローカーがいたりとかですね、やはり値段がどんどん、どんどんつり上がっていった。その仕組みにおいて、私たちは、どこから輸入されたもので、どういう経路でうちの池まで届いたのか、そこをまずオープンにしなきゃいけないということで、カナダ、アメリカ、両方からウナギの仕入れをトライしました。市場から手繰り寄せで販売先を見つけたと。まあそこで一応購入が決まって、去年の5月の段階で、アメリカロストラータ、カナダロストラータを池入れテストのために5,000匹と1万5,000匹を購入して試験しています。

——うまくいきましたか。

金子社長：やはり病気や寄生虫などのいろいろな問題が出てくるので、それをクリアしていかなきゃいけないのですね。そのためには水温であったり、塩水であったり、そういった類のものを何度か試しながら今日に至っていますが、やはり生存率が非常に低いです。

———そういったところはまだ今後、少し開発というか、修正の余地があるのかなという部分でしょうかね。

金子社長：そうですね、はい。

———そういった中で、もう本番用の養鰻場をつくってしまったわけですか。

金子社長：はい。無謀ですよ。というのも、ウナギは1年育ててきて、ある程度の大きさまできているなど。それで、ウナギにとって一番いい環境というものは、広さがあることなのですね。昭和事業所内では面積に限界があると感じていました。広いスペースに、ウナギをどれぐらい入れることが適切なのだろう。これはやってみないとわからないので、まずはつくってみようと思いついたわけですね。



【赤城山麓の養鰻場の様子】

———今後の見通しとすると、いかがでしょうか。

金子社長：1年後に、まずこの昭和事業所の敷地内でお

弁当販売と、店内で食するための店舗をつくらうと考えています。その後は群馬県内で興味のある方に、どんどんフランチャイズでお出しできればいいかなと思っています。まずは群馬県内に2,000円以下で特上ウナギが食べられる、そういうお店をつくりたいということです。

———うわっ、いいですね。

金子社長：ええ。それもおなかいっぱい食べてもらって2,000円です。それでも私の中では高いなと思っていますが。

———ああ、そうですか。

金子社長：なので、いかに原価を下げられるかなのです。それと、養殖事業をすることで、雇用増加も狙っています。やはり働いている人が夢を抱くことができる会社でありたい。群馬県の中では、まだそういうベンチャーがあまりないものだから。

———海なし県の群馬でウナギが誕生って、なんかいいですね、夢があって（笑）。

金子社長：あるでしょう。でも群馬県って海がない代わりに山がいっぱいあるでしょう。山には地下水がいっぱいありますから。特に赤城の山というのは、国定忠治でも有名な山だと思いますが、そのふもと地下120メートルぐらい掘ると、水質試験場のお褒めの言葉もいただけるような、非常にいいお水が採れます。ですので、群馬県というのは水の宝庫でもあると。

———ああ、それをウナギが象徴してくれる日がくる。

金子社長：そうですね。それが一番の望みですね。

———ところで、金子社長は会社設立前ってどんなお仕事をしていたのですか。

金子社長：事務系、営業、サービスなど、いろいろな仕事を経験しました。もともとは、ある大手電機メーカーで購買を担当していました、そこで仕入れ先に対する考え方っていうものをしっかり教えていただきました。サービス業では、いかにお客さんのニーズに合わせることを重要にしなきゃいけないかということを学んできました。ですので、手前みその自己満足の営業はしません。あくまでもお客さんの声を聞いたものの中から、よりおいし

く、より安く、よりよいものを、安全なものをお客さまに提供できるようにする、ということはそこで学んでいます。

——新しいことに挑戦するときに、一番大切なものは、金子社長、何だと思えますか？

金子社長：アイデアと発想力だと思いますね。その後は、それを現実にするための労力というものは、どうしたって必要になりますが、そのときにみんな、それを諦めてしまうか、形にしていくか、それだけの違いですね。

——どうしてもリスクを考えてしまいがちですが。

金子社長：そうですね。リスクというものは、投資金額に応じて増減します。投資金額が大きくなれば大きくなるほど、やる気が薄れてくる。なぜなら、どうしたって企業には限界がありますから。つくって間もない会社が、億単位のお金を借りようと思ったら、それは無理ですよ。よっぽど多くの資産や担保になるものがなきゃ駄目だと金融機関さんはおっしゃってくる。でも我々のようなベンチャー企業、裸一貫で立ち上げている会社は、そういったものは全くないわけですね。でもそんなとき、助けていただける公的金融機関さんが多いので、ぜひ皆さん、ご活用されたほうがよろしいかと思えます。スタート時期に、保証協会さんや政策金融公庫さんがあったからこそ、今のジースリーがあると私自身は感じています。それがなかったら今の自分はいません。

——これからのますますのチャレンジに期待しております。

金子社長：ありがとうございます。

——ウナギの養殖に挑戦している伊勢崎市の株式会社ジースリー、金子史朗社長にお話を伺いました。ありがとうございました。

金子社長：ありがとうございました。

エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日は、番組前半は、群馬医療福祉大学をはじめ専門学校、認定こども園などを運営する学校法人昌賢学園の鈴木利定理事長のトップインタビュー、そして後半は、群馬県内でウナギの養殖に挑戦している伊勢崎市の株式会社ジースリーを紹介しました。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」この番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

FM GUNMAと当協会の共同制作番組
チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～

【12月の放送のお知らせ】

令和2年12月3日（木）12:00～12:55

再放送 12月5日（土）8:00～8:55

ぜひお聞きください！